

『放射性廃棄物研究』に未来の輝きを願って

日本原子力学会放射性廃棄物部会長

動力炉・核燃料開発事業団 技術参与 橋本好一

The Bulletin of the Atomic Scientists の表紙の左上隅で、人類の心の平穩を時の形で刻む「終末時計」が新年号からは4年ぶりに一挙に3分も進み、地球滅亡の日(私は現在の地上生物の大量死滅=生態系の激変の日としか思いませんが)とされる午前零時に14分前になったとのこと。冷戦構造は崩壊したのに各地に紛争は頻発し、終末兵器とされる核爆弾の大量存在とその使用を危惧してのことでしょうが、同じように原子力の平和利用においても、安全の徹底追求と放射性廃棄物の安全な処理処分問題はシステムとして早急に技術確立しなくてはならない重大な課題です。

21世紀までの時間は5年を切りました。新世紀の到来だけでなく、1000年を一駒とする新しい時代の幕開けが近いわけですが、この時代は地層処分システムにおける人エバリアの性能を維持させたい時間帯であるとも言えます。

国の方針に沿って進めるためには、私達は2020年頃の社会および国民が選択してくれる“安全な地層処分”の実現可能性を科学的・技術的に実証する体系的な研究開発を進めることは勿論のこと、処分システムおよび処分場設計・施工を評価し担保できる技術を物差しも含めて確立すること、ならびに実証結果をタイミング良く国民に対し提示することが重要であり、また、「世代間の公平(子孫に対する倫理)」および「現世代内の公平(地域格差の是正)」という倫理2原則を踏まえた施策の実施と併せて、社会的合意の形成を図っていくことが肝要だと考えます。

放射性廃棄物部会は昭和59年10月発足の研究連絡会時代から、学会最大の組織として(現在385名)熱心な活動が展開され、研究領域が時空的にも広く、自然科学から理学・工学、さらには社会学的側面をも対象とすることから、春の年会、夏のセミナー、秋の大会では広い分野の研究者間で自由かつ熱心な発表・討議がなされ、研究論文の幅が広がり、発表内容も深みを増し、件数も増加の一路をたどっていることは部会の活性を示す指標として喜ばしい限りです。

この度、部会誌『放射性廃棄物研究』第2巻第1、2号合併号をお届けする運びとなりました。昨年春の年会(東工大)での企画セッション講演要旨の他に、特集「群分離・消滅処理と放射性廃棄物処理処分」7件、特集「ナチュラルアナログ」6件および3件の研究論文等が掲載されています。部会誌の発行は執筆者各位の積極的なご協力と出版小委員会の方々の大変なご努力の賜物でありまして、ここに関係された方々に厚くお礼申し上げる次第です。今後とも、部会員各位の積極的な投稿と支援によりまして部会誌の充実・向上が図られることを期待します。